

St. Luke's International University Repository

Evaluation of the 1994 Revised Curriculum by Graduating Senior Students of St.Luke's College of Nursing, Class of 1999, after Completion of the Baccalaureate Program.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 助川, 尚子, 菊田, 文夫, 堀内, 成子, 森, 明子, 久代, 和加子, 桃井, 雅子, 藏屋, 千秋, 池谷, 桂子, 片桐, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/382

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



報 告

卒業時の学生によるカリキュラム評価

小澤 道子¹⁾ 助川 尚子²⁾ 菊田 文夫³⁾ 堀内 成子⁴⁾
 森 明子⁵⁾ 久代和加子⁶⁾ 桃井 雅子⁷⁾
 藏屋 千秋⁸⁾ 池谷 桂子⁹⁾ 片桐 和子⁹⁾
 (カリキュラム評価第3ワーキンググループ)

要 旨

本報告は、1995年にスタートした改訂カリキュラムで学習した学生達が卒業する年を迎え、学生側のカリキュラムに対する満足度と教科カリキュラムの順序性と統合性に対する意識を知ることを目的に卒業直前の4年生57人を対象に質問紙法を用いて調査した。

質問紙の内容は、教科カリキュラムの統合性を知るために「総合看護・看護研究Ⅱ」と履修した科目との関連、カリキュラムの満足度合とその理由、授業や教育システムに対する評価などである。なお、授業や教育システムに関する項目は、ベネッセ文教総研(1997)より10項目を使用した。

結果：

①「総合看護・看護研究Ⅱ」の学習には履修教科目が関連していた人は、約8割であり、また、科目群間の満足度の相関では、「総合看護・看護研究Ⅱ」と実習科目・専門科目・基礎科目群と有意な相関があった。

②カリキュラムに対する満足度は、全体的に高い傾向であり、「総合看護・看護研究Ⅱ」・専門科目群、実習科目群の順に満足度は高かった。学習資源は満足度合いの分布に幅があった。

③学生の授業・教育システムに関する肯定的評価が6割以上のものは、「専門的知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ」などであり、一方「情報処理関係の教育の充実」は、肯定評価約2割と項目により評価が異なった。他大学と比較して、本学で評価の高いものは、「教材がよく研究されている」「わかりやすい授業が多い」「自分の視野を広げるのに役立つ」であり、逆に情報処理関係の教育の充実していないことがしめされた。

今後、同一内容を経年的に追跡していくことと、質問項目の具体化の検討が残された課題である。

キーワード

改訂カリキュラム, 学生評価, 卒業時点

I. はじめに

1970年から本学教育の根本的再検討が提案され、1995年に改訂カリキュラムがスタートし、1999年3月には改訂カリキュラムで学習した学生達が卒業することになった。したがってカリキュラムの見直しと評価を含め、よりよい改善に向けての取り組みへの努力は、カリキュラムを運用している教員当事者に課せられた課題である。

本調査は、カリキュラムの受け手である学習者に焦

- 1) 聖路加看護大学教授(基礎看護学)
- 2) 聖路加看護大学教授(英語)
- 3) 聖路加看護大学助教授(健康科学)
- 4) 聖路加看護大学教授(母性看護学)
- 5) 聖路加看護大学助教授(母性看護学)
- 6) 聖路加看護大学講師(老人看護学)
- 7) 聖路加看護大学助手(母性看護学)
- 8) 聖路加看護大学助手(小児看護学)
- 9) 聖路加看護大学助手(成人看護学)

表1 「総合看護・看護研究Ⅱ」と関連のあった科目の有無

関連のあった科目があると答えた学生			無記入	合計 人(%)
◎○の両方回答した学生	◎のみ回答した学生	○のみ回答した学生		
38(73.1)	3(5.8)	2(3.8)		
43(82.7)			9(17.3)	52(100)

注: ◎はとても関連 ○は少し関連

表2 「総合看護・看護研究Ⅱ」と関連のあった科目群ごとの出現率

	専門科目群 n=36	基礎科目群 n=31	教養科目群 n=29
70%以上	看護研究Ⅰ		
60%以下		生涯発達論(Ⅰ・Ⅱ)	
50%以下	生涯発達看護論Ⅰ 生活と健康		
40%以下	総合実習	家族関係論	応用社会学 心理学 統計学演習
30%以下	家族発達看護論Ⅰ 臨地実習B 看護援助論Ⅲ 臨地実習D 助産学(Ⅰ～Ⅴ) 看護学概論 看護援助論Ⅰ 慢性期看護論Ⅰ 臨地実習A 看護技術論	形態機能学 ヒューマンセクシャリティⅠ 生命倫理	哲学 倫理学
20%以下	臨地実習C 臨地実習E 看護提供システムⅠ 看護援助論Ⅳ リハビリテーション看護論Ⅰ 地域看護論Ⅱ 急性期看護論Ⅰ 臨地実習G 家族発達看護論Ⅱ 看護援助論Ⅱ 臨地実習F 看護提供システムⅡ	形態機能学演習 集団力動論 栄養学 ヒューマンセクシャリティⅡ 疾病治療各論	総合科目Ⅰ 女性学 教育方法学 社会学
10%以下	地域看護論Ⅰ 地域看護論Ⅱ 看護政策論 看護ゼミナール 慢性期看護論Ⅱ リハビリテーション看護論Ⅱ 急性期看護論Ⅱ ターミナルケア論 急性期看護論Ⅲ	疾病治療概論 環境論(Ⅰ・Ⅱ) 保健医療福祉行政論 保健医療福祉政策論	教育学 応用心理学 キリスト教倫理 国語表現法 情報処理演習 総合科目Ⅱ

〈◎および○の出現率: 科目/科目人数〉

点をあて、学習者(学生)が卒業直前に4年間を振り返った時のカリキュラムに対する満足度と教科カリキュラムの順序性、統合性に対する意識を知ることが目的とした。

本学の教科カリキュラムの特徴は、①順序性②統合性③自己学習力の重視であるという前提にたち、調査においては総合看護・看護研究Ⅱを教科カリキュラムの統合的学習の指標とした。なお、本調査においては「カリキュラム」という言葉に、教科目・学習資源・行事・課外活動など大学が教育として意図しているものを含めた。

対象と方法

対象は、1995年に改訂されたカリキュラムで学習した4年生57名(class of 1999)全員であり、1999年3月(卒業直前)に質問紙を教室内で配布し、その場で回収をした。回収率は91.2%(52/57)であった。

質問紙の内容は、教科カリキュラムの統合性を知るために「総合看護・看護研究Ⅱ」と履修した科目との関連、1年次と4年次に希望する科目とその理由、カリキュラムの満足度合とその理由、授業や教育システムに対する評価、その他カリキュラムに対する自由な意見などである。

なお、授業や教育システムに関する項目は、大学満足度と大学教育の問題点(ベネッセ文教総研: 1997全国国公私立大学191校調査報告書¹⁾)より10項目を抜粋して用いた。

結果と考察

1. 「総合看護・看護研究Ⅱ」と関

連のあった科目

教科カリキュラムの統合性を知るために、「総合看護・看護研究Ⅱ」を統合化の指標とし、専門・基礎・教養科目を含めた86授業科目について、その関連性を検討した。なお、関連性の度合はとても関連があった(◎)と少し関連があった(○)の2段階で求めた。

1) 関連のあった科目の有無

「総合看護・看護研究Ⅱ」に関連のあった科目があった学生は、43人(82.7%)で、残り9人(17.3%)は回答がなかった(表1)。

さらに、関連のあった学生(n=43)のうち、「総合看護・看護研究Ⅱ」にとても関連のあった科目を記した学生(◎)は40人で、科目数は169科目、一人当たりの平均4.2科目(範囲1~12)であった。一方、少し関連のあった科目(○)は39人で1人当たりの平均5.5科目(範囲1~19)であった。

関連の度合は、「◎○両方」「◎のみ」「○のみ」の3つの回答パターンに分けられ、「◎○両方」は38人、「◎のみ」は3人、「○のみ」は2人と「◎○両方」で回答した者が最も多かった。

以上、「総合看護・看護研究Ⅱ」に8割以上の学生が何らかの科目との関連性をあげているが、関連性に回答のない約2割の学生も存在し、これらの学生については注目しておきたい。

2) 科目群ごとの出現率

「総合看護・看護研究Ⅱ」に関連のあった科目を科目群ごとに出現率を算出した(表2)。出現率は科目群の回答人数中の各科目回答数である。各科目群の回答人数は、専門科目群が36人、基礎科目群が31人、教養科目群が29人であった。

専門科目群、基礎科目群、教養科目群別に、出現率が30%以上あった科目に注目すると、専門科目群では「看護研究Ⅰ」27人(75.0%)、「生涯発達看護論Ⅰ」17人(47.2%)、「生活と健康」15人(41.7%)、「総合実習」11人(30.6%)、基礎科目群では「生涯発達論Ⅰ・Ⅱ」16人(51.6%)、「家族関係論」10人(32.3%)、教養科目群では「応用社会学」10人(34.4%)、「心理学」10人(34.4%)、「統計学演習」10人(34.4%)であった。

仮に30%以上の出現率の科目は「総合看護・看護研究Ⅱ」に関連性が強いと考えれば、「専門科目群」「基礎科目群」「教養科目群」すべての科目群が「総合看護・看護研究Ⅱ」に関連のあった科目を含んでいるといえる。特に「看護研究Ⅰ」は、直接的に論文のすすめ方、まとめ方に関連しているため高い出現率となっていると解釈できる。その他の科目も健康とは何か、人間とは何かに関することであり、「総合看護・看護研究Ⅱ」をすすめる上で対象に関

表3 「総合看護・看護研究Ⅱ」と関連のる科目群ごとの回答パターン

回答パターン	人(%)	計(人)
1. 専門・基礎・教養科目すべてに回答	22(42.3)	52
2. 専門科目・基礎科目に回答	9(17.3)	
3. 専門科目・教養科目に回答	7(13.5)	
4. 専門科目のみに回答	5(9.6)	
5. 回答なし	9(17.3)	

表4 1年次に学びたい科目名とその割合(16/52人)

科目名	人(%)	今年次
看護援助論Ⅲ	9(56)	2
看護援助論Ⅰ	7(43)	2
看護援助論Ⅱ	7(43)	2
看護援助論Ⅳ	1	2
生涯発達看護論Ⅰ	1	2
ターミナルケア論	1	3
看護研究Ⅰ	1	4
家族関係論	1	2
ヒューマンセクシャリティ	1	3
生命倫理	1	3
疾病・治療概論	1	2
疾病・治療各論	1	2
中国語	1	1・2
情報処理演習	1	1・2

する情報として意識されているものと思われる。

3) 科目群ごとの回答パターン

「総合看護・看護研究Ⅱ」に関連のあった科目について、科目群ごとの回答パターンを検討した(表3)。回答パターンは5つに分かれた。すなわち「専門・基礎・教養科目群すべてに回答」22人(42.3%)がいちばん多く、次いで「専門・基礎科目群に回答」9人(17.3%)、「専門・教養科目群に回答」7人(13.5%)、「専門科目群のみに回答」5人(9.6%)、そして「いずれも回答なし」9人(17.3%)の順であった。

2. 学生の希望する科目配置

教科カリキュラムの順序性を知るために、科目の希望配置を求めた。その結果1年次にあった方がよい科目については16人(28.1%)で(表4)、4年次にあった方がよい科目は22人(38.6%)が回答した(表5)。いずれも回答率が3割前後であり全ての学生の意志を反映しているとはいえないが、学生の意見としては次のことがあがった。

まず1年次にあった方がよい専門科目群の科目では、現行2年次にある「看護援助論Ⅲ」9人(56%)、

表5 4年次に学びたい科目名とその割合(22/52人)

科目名	人(%)	今の年次
看護提供システムⅠ	5(23)	1
生活と健康	1	1
地域看護論Ⅰ	1	2
看護提供システムⅡ	1	4
家族発達看護論Ⅱ	1	4
看護ゼミナール	1	4
ヒューマンセクシャリティ	2	3
保健医療福祉行政論	2	2
生涯発達論Ⅰ・Ⅱ	1	1
形態機能学	1	1
家族関係論	1	2
集団力動論	1	3
環境論Ⅰ・Ⅱ	1	1
疾病・治療概論	1	2
疾病・治療各論	1	2
保健医療福祉政策論	1	3
統計学	8(36)	1・2
心理学	2	1
教育学	1	1
応用心理学	1	2

「看護援助論Ⅰ」7人(43%),「看護援助論Ⅱ」7人,「看護援助論Ⅳ」,「生涯発達看護論Ⅰ・Ⅱ」,「ターミナルケア論」,「看護研究Ⅰ」各1人であり,これらは入学してすぐに看護について学びたかったという思いがあるのであろう。基礎科目群では「家族関係論」,「ヒューマンセクシャリティ」,「生命倫理」,「疾病・治療概論」,「疾病・治療各論」が各1人であり,教養科目群では「中国語」,「情報処理演習」各1人であっ

た。

一方,学生が4年次に学びたい専門科目群は,現行1年次にある「看護提供システム」5人,「生活と健康」1人,「地域看護論Ⅰ」1人であった。「看護提供システムⅡ」,「家族発達看護論Ⅱ」,「看護ゼミナール」各1人は,現行4年次の科目であり,このままでよいということであろう。基礎科目群では「ヒューマンセクシャリティ」2人,「保健医療福祉行政論」2人,「生涯発達論Ⅰ・Ⅱ」,「形態機能学」,「家族関係論」,「集団力動論」,「環境論Ⅰ・Ⅱ」,「疾病・治療概論」,「疾病・治療各論」,「保健医療福祉政策論」各1人であった。教養科目群では「統計学」8人(36.0%),「心理学」2人,「教育学」1人,「応用心理学」1人であった。

以上現行のままでよいとする科目や学年配置を変えたいとする科目もあった。しかし順序性に対して回答のない約8割の学生は,「単に関心がない」のか,「現行の順序性をよしとしている」のかなどを,今後の課題として調査に工夫を加えながら経過を見ていく必要がある。

3. カリキュラム全体に対する満足度

1) 満足度分布

教養科目・基礎科目・専門科目・実習科目群・総合看護・看護研究Ⅱ・学習資源・行事・課外活動それぞれについて“満足”5から“不満足”1までの5段階の中から一つを選択することを求めた。その結果,項目毎に様々な分布が認められた(図1)。満足に関して“満足”と“やや満足”をあわせて検討すると「専門科

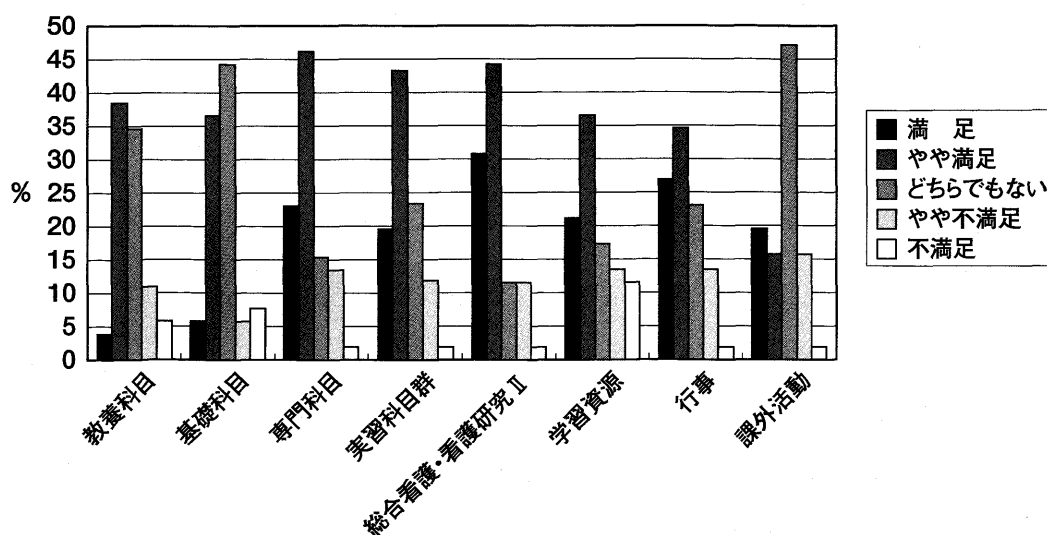


図1 カリキュラムへの満足度

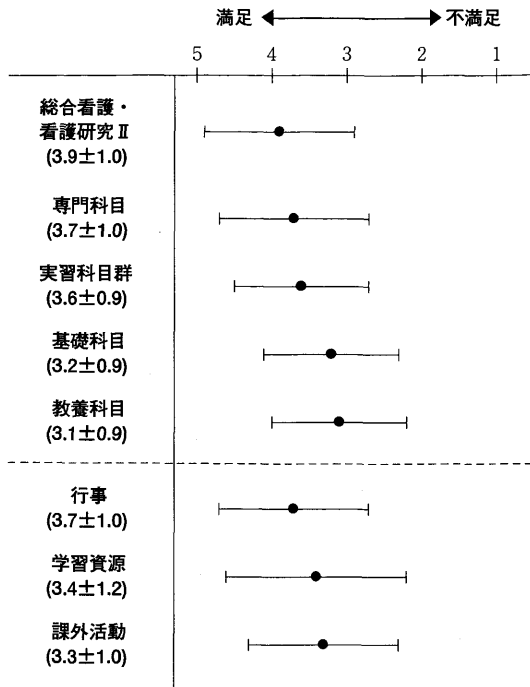


図2 カリキュラム満足度—平均値と標準偏差

表6 カリキュラムの満足度の理由に関する記述率

項目	記述率 (／52)
教養科目	21人 (40.4%)
基礎科目	12 (23.1%)
専門科目	13 (25.0%)
実習科目	11 (21.2%)
総合看護・看護研究Ⅱ	12 (23.1%)
学習資源	13 (25.0%)
行事	14 (26.9%)
課外活動	12 (23.1%)

表7 カリキュラムの満足度の理由に関する記述内容件数

項目	記述内容類型				計 件数
	満足	不満	自分への振り返り	意見・要望など	
教養科目	7	8	7	4	26件
基礎科目	3	5	4	4	16
専門科目	2	6	2	9	19
実習科目	3	3	8	1	15
総合看護・看護研究Ⅱ	5	2	4	3	14
学習資源	4	15	0	6	25
行事	16	3	0	5	24
課外活動	5	2	7	2	16

目」「実習科目群」「総合看護・看護研究Ⅱ」において、それぞれ36名(69.2%)、32名(62.7%)、39名(75.0%)と満足と答えた者の割合が多かった。一方「学習資源」に関しては「不満足」の度合いが6名(11.5%)と他の項目と比べて多く、また、「やや満足」の度合いも19名(36.5%)と多かった。

2) 教科目とそれ以外の平均値と標準偏差

各項目ごとに満足度の5段階尺度を得点化して、平均値と標準偏差を算出した。その結果、教科目とそれ以外の項目ともに「満足」の方向に分布していた(図2)。教科目では「総合看護・看護研究Ⅱ」、「専門科目」、「実習科目群」の順で満足度が高かった。それ以外の項目では、「学習資源」において分布の幅が広がった。

3) 満足度の理由に関する自由記述の記述状況

a. 記述率

満足度8項目それぞれについてその理由を自由記述で求めた結果、32名(61.5%)の学生が記述していた。教科目および学習資源に対する記述率は、教養科目が40.4%と最も多く、実習科目群は21.2%と最も少なかった(表6)。

b. 満足度の理由に関する自由記述内容

自由記述の内容分析は、次の手続きで行った。①意味のとれる最小単位を1件とし、②例として挙げられた語句や文脈は、独立件数にしないこと。また、③意味内容の分類は、担当者間で一致するか否かの検討をしながら行った。

自由記述の内容件数は、教科目と学習資源とを合わせて総計155件で、1人平均4.8件であった。教科目および学習資源ごとの記述内容の類型化と出現件数は、表7に示した。

教養および基礎科目は、満足より不満が若干多く、専門科目は、意見・要望と「課題が多すぎるなど」不満が多かったが、内容は特定の科目に集中していた。実習科目は、「もう少しやるべきだった・充実していた・体力的に厳しかったなど」自分自身への振り返りがもっとも多かった。総合看護・看護研究Ⅱは、「希望通りのことができた・やりがいがあったなど」の満足と「もう少し時間をかけて掘り下げたかった・充実感がある日々だったなど」自分自身への振り返りが多かった。学習資源では、「コンピューターの故障・トラブル・使いたい時につかえないやコピー機が混んでいるなど」の不満足と「図書館の開館時間の延長など」の意見・要望が大部分を占め、行事は「楽しかったな

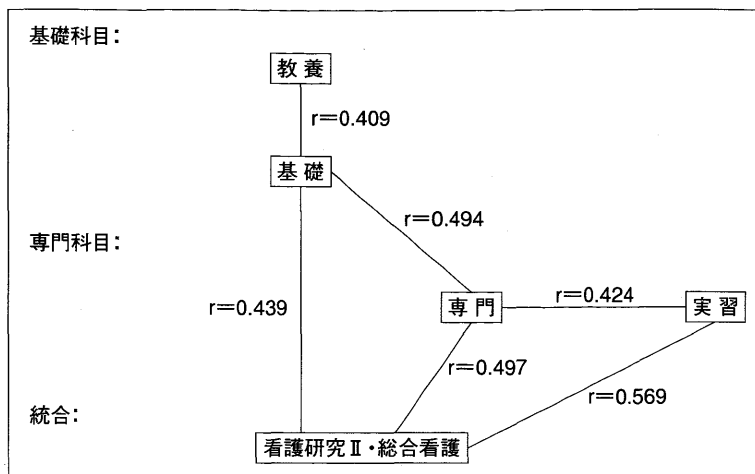


図3 教科科目群間の満足度の相関

ど」満足が多く、課外活動は「よく遊びよく働いた・活発でなかったが色々できたなど」自分自身の振り返りと「部活など自由であったなど」の満足が多かった。

4) 科目群間の満足度の相関

5つの教科科目群間の満足度の関連を知るため、相関をみた（スピアマンの相関）（図3）。「看護研究Ⅱ・総合看護」と、「基礎科目」（ $r=0.439$ ）、「専門科目」（ $r=0.497$ ）、「実習」（ $r=0.569$ ）の3科目群との間に有意

な相関が認められ、さらに「教養」と「基礎」、「基礎」と「専門」、「専門」と「実習」の間にも、有意な相関があった。

以上、カリキュラム8項目に対する学生の満足度は高い傾向にあることが明らかになった。今後、これらの満足がどのような内容を指しているのかを知るための、情報収集の在り方を検討していきたいと考えている。また、特に「学習資源」については満足・不満足分布の幅が広く、今後分布の意味を明らかにしていきたい。

また、満足度の自由記述は、教科目だけでなく、学習資源についても設定しており、カリキュラム全体を網羅するものではあった。しかし、自由回答方式では書きたい学生だけが回答し、また、具体的、限定的にたずねていないため、具体的にカリキュラムの改善にはつなげていきにくいことが指摘された。今後は、今回の自由記述内容を生かしていくつかの視点を定め、より具体的な質問項目を作成することが次の課題として残された。

4. 学生からみた授業・教育システム

学生から見た授業・教育システムの評価として、ベ

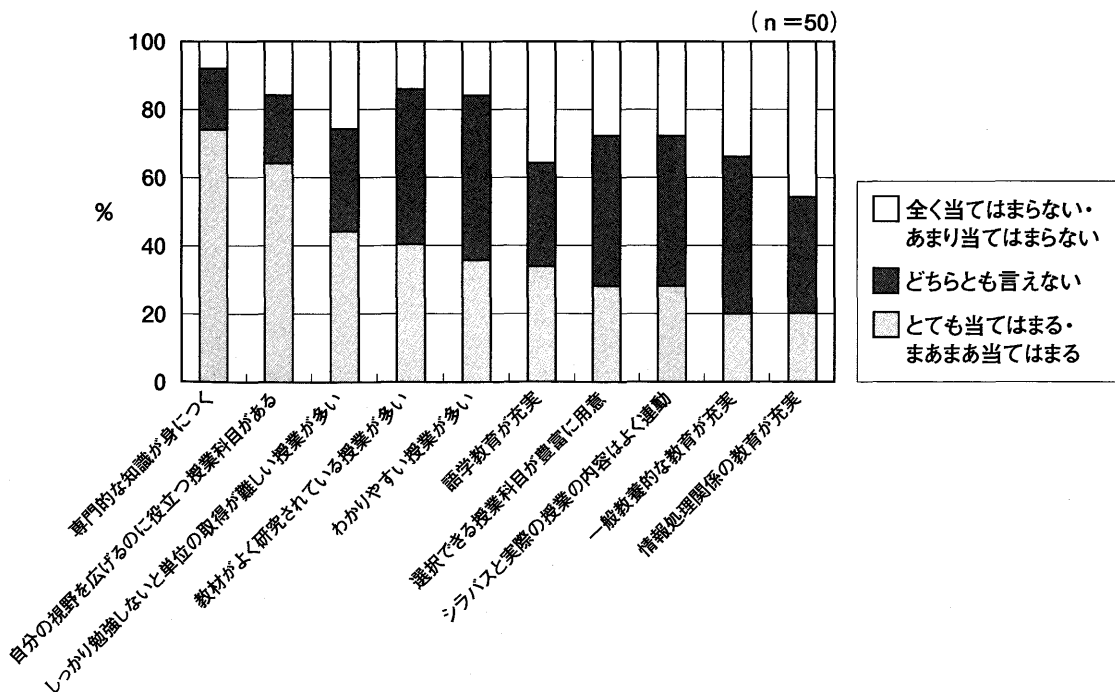


図4 学生による授業・教育システムの評価

ネッセ文教総研1) (以下ベネッセとする) より10項目を採択し、各項目は、5段階尺度(5:とても当てはまる, 1:全く当てはまらない)で回答を求めた。これらの結果は、本学と他大学の比較が可能であり、本学の特徴を知る手がかりになると考え、本学と全国大学、本学と私学、および本学と女子大学などと比較検討をした。

1) 学生からみた授業・教育システムの評価

図4は、各項目毎に、5段階で回答が得られたものを、更に「とても当てはまる」と「まあまあ当てはまる」を肯定的な評価、「全く当てはまらない」と「あまり当てはまらない」を否定的な評価、「どちらでもない」の3段階でまとめ、肯定的な評価が得られた項目順に表わしたものである。

肯定的な評価が3割以上を占めている項目に注目すると「専門的な知識が身につく」から「語学教育が充実している」までの6項目となり、「選択できる授業科目が豊富に用意されている」「シラバスと実際の授業の内容は良く連動している」「一般教育が充実している」「情報処理関係の教育が充実している」の4項目は3割以下であった。

同様に、否定的評価が3割を越えるものは、「語学教育が充実している」「一般教育が充実している」「情報処理関係の教育が充実している」の3つの項目があげられたが、それ以外は含まれなかった。

以上をまとめると「専門的な知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある」「しっかり勉強しないと単位の取得が難しい」「教材がよく研究されている授業が多い」「わかりやすい授業が多い」は、肯定的な評価が高く、一方、「一般教育が充実している」と「情報処理関係の教育が充実している」の2項目は、否定的な評価が高いという結果であり、看護学という専門領域を学ぶ単科大学の特色を反映しているとも考えられる。また、情報処理関係の教育の充実や、一般教養に関する教育の充実などを検討していくこともこれからの課題としてあげられる。

2) 本学と他大学との比較

本学の特徴を知るため、ベネッセ報告書の全国大学、私学、女子大学などの結果と本学を比較した。しかし、いずれもほぼ類似する結果であったので、ここでは、全国大学と本学の比較を示す。その結果、本学の特徴を示している項目は、「教材がよく研究されている授業が多い」と「情報処理関係の教育が充実している」であった(図5, 6)。すなわち、「教材がよく研究されている授業が多い」は、「まったく当てはまらない」が、本学とベネッセ全体では約7%と近似であるが、「あまり当てはまらない」ではベネッセが36%に対し本学6%と低く、更には、「とても当てはまる」と

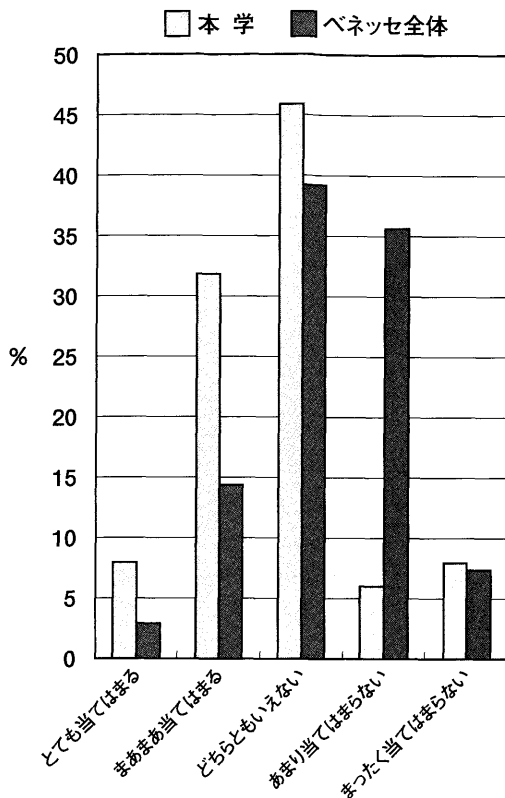


図5 教材がよく研究されている授業が多い

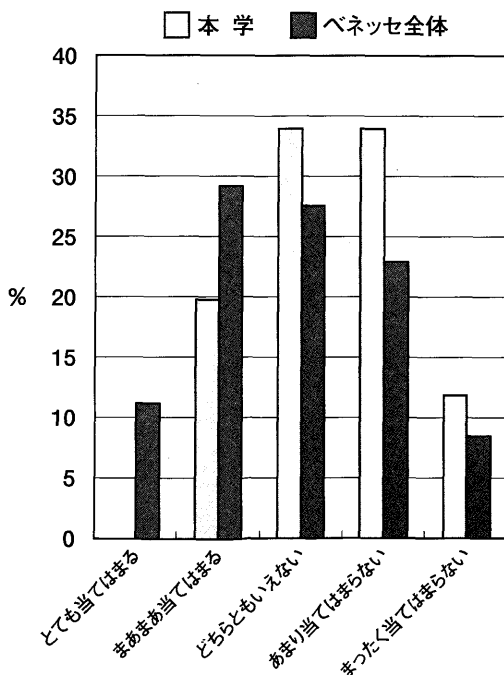


図6 情報処理関係の教育が充実している

表8 学生からみた授業・教育システム—本学とベネッセ全体との比較—

当てはまる	1	教材がよく研究されている授業が多い	22.6
	2	わかりやすい授業が多い	12.7
	3	自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある	12.0
	4	専門的な知識が身に付く	5.3
	5	しっかり勉強しないと単位の取得が難しい	0.3
	6	語学教育が充実している	- 6.4
	7	シラバスと実際の授業の内容はよく連動している	- 9.5
	8	一般教育が充実している	-17.2
	9	選択できる授業科目が豊富に用意されている	-17.3
	10	情報処理関係の教育が充実している	-20.6
当てはまらない	1	情報処理関係の教育が充実している	14.3
	2	シラバスと実際の授業の内容はよく連動している	6.8
	3	一般教育が充実している	4.9
	4	語学教育が充実している	4.7
	5	自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある	- 1.4
	6	専門的な知識が身に付く	- 3.8
	7	選択できる授業科目が豊富に用意されている	- 5.9
	8	しっかり勉強しないと単位の取得が難しい	- 5.9
	9	わかりやすい授業が多い	-19.6
	10	教材がよく研究されている授業が多い	-29.2

(*単位: % *本学10% = 5人)

「まあまあ当てはまる」を合わせると本学40%, ベネッセ17.4%と本学がより高く、この項目に関して、本学の方が全国より評価が高いと解釈できる。

一方、「情報処理関係の教育が充実している」は、「まあまあ当てはまる」では本学20%, ベネッセ29.3%と本学のほうが低く、「とても当てはまる」では本学は0%に対しベネッセ11.3%で、この項目に関して、全国大学と比較して本学での評価は低いことが示された。

更に、各項目について本学の特徴を知るために、次の手続きをとった。「とてもあてはまる」と「まあまあ当てはまる」を『当てはまる』とし、同様に「全く当てはまらない」と「あまり当てはまらない」も『当てはまらない』としてまとめ、「どちらとも言えない」は、除外して検討した。そして、各項目の『当てはまる』と『当てはまらない』として得られた結果は、本学からベネッセの全体を引き(本学-全国大学=差)、その差の大きいものから順に示した(表8)。なお、マイナスの値は、全国大学の方が回答率が高いことを意味することになる。

検討にあたり、本学とベネッセ全体との差の値の10%に注目した。なお本学において10%は学生5人に

相当する。その結果『当てはまる』において10%を越えた項目は、上位から順に「教材がよく研究されている授業が多い」、「わかりやすい授業が多い」、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目がある」があげられた。一方マイナスの値は、下位のものから順に「情報処理関係の教育が充実している」「選択できる授業科目が豊富に用意されている」「一般教養が充実している」などであった。

同様に『当てはまらない』で10%を越えた項目は、唯一「情報処理関係の教育が充実している」(14.3%)で本学の方が高い結果が得られた。また、マイナスの値を示したものは「教材がよく研究されている授業が多い」「わかりやすい授業が多い」であった。

つまり、本学の特徴として、「教材がよく研究されている授業が多い」「わかりやすい授業が多い」などが他大学より肯定的に評価され、「情報処理関係の教育が充実している」が否定的に評価されているということである。

これらの結果はベネッセの全国大学と本学との比較であり、対象者数に大きなひらきがあるが、今後の授業や教育システムの中で次のような有用な示唆を示しているといえる。

すなわち、『当てはまらない』項目の上位に、情報処理関係の教育の充実をはかることがあがったが、これは教育資金とも関係することであり、総合的にそして、長期的に検討していく必要があると思われる。しかし、より実現可能なものに着眼すると、授業の内容をシラバスと連動させることがより優先される課題となる。

また、専門職を目指して、重点的に専門領域の学びを深める看護大学の特徴として、情報処理関係の充実、豊富に選択できる授業科目の準備、一般教養の充実などの項目に関して、一般の大学に比べ低い評価が得られたのは予測できることであった。しかし、「専門的な知識が身に付く」項目が、『当てはまる』の10%以上に含まれていなかったことは、授業・教育システムを検討し、より専門性を高めた教育を目指していく努力の必要性として受けとめたいと思う。

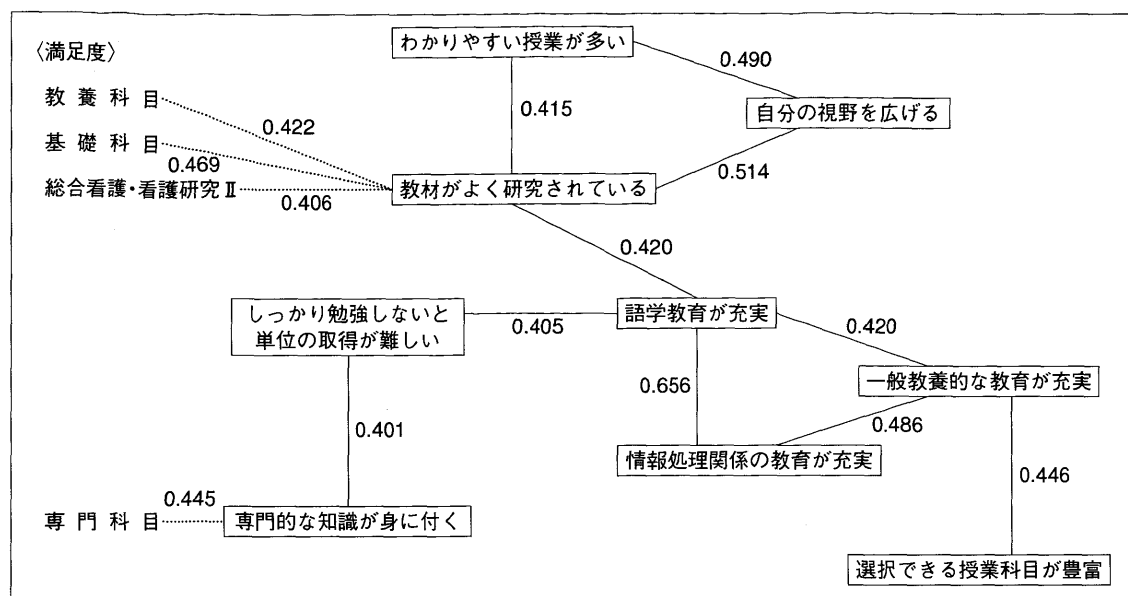


図7 カリキュラム満足度と授業教育システムの相関

5. 教科カリキュラム満足度と授業・教育システムの相関

教科カリキュラム満足度（5項目）と授業・教育システム（10項目）との相関（スピアマン）を検討した（図7）。教科カリキュラム満足度の「教養科目」「基礎科目」「総合看護・看護研究Ⅱ」と、授業・教育システム評価項目の「教材がよく研究されている」との間には、有意な正の相関（ $r=0.406\sim0.469$, $P<0.01$ ）があった。つまり「教養科目」に対する満足度が高ければ高いほど「教材がよく研究されている」の評価も高くなっていったことを示している。

「専門科目」は「専門的知識が身につく」との間には正の相関（ $r=0.445$, $P<0.01$ ）があった。

更に、授業・教育システム評価項目間の相互の関係を見ると、「わかりやすい授業が多い」と「教材がよく研究されている授業が多い」、「教材がよく研究されている授業が多い」と「視野を広げるのに役立つ科目がある」、「わかりやすい授業が多い」と「視野を広げるのに役立つ科目がある」の間に正の相関があった。また、「一般教養が充実している」は、「語学教育が充実している」「情報処理関係の教育が充実している」「選択できる科目が豊富に用意されている」との間に正の相関があった。この相関の意味する事は、カリキュラム改革にて意図したりベラル・アーツの重視と合致するものであろう。

「しっかり勉強しないと単位が取れない」は、「語学教育が充実している」と「専門的知識が身につく」との間に、相関があった。このことは、本学が伝統的

に守ってきた語学教育と看護専門教育の関連さ、カリキュラムに反映していることと解釈できよう。

また、授業・教育システムの評価項目の内、「シラバスと授業の内容はよく連動している」では、教科カリキュラムとの相関は認められなかったこと、そして教科科目の中で実習科目群は、授業・教育システムの評価項目との間に有意な相関は見出せなかったことは、今後とも注目しておきたいことである。

6. カリキュラムに対する意見

4年間のカリキュラムに関する意見を自由記述で求めた。その結果記入があったものは14人（26.9%）と少なかった。記述内容は、肯定的意見、否定的意見、要望、自分自身の振り返りに分類された（表9）。

肯定的意見は、「受け身の授業ではなく、自分にとって財産となる」「教育理念と内容が大変連動している」「よく練られ考えられたカリキュラム」などであった。

否定的意見は、「5コマ続くと集中力が落ち、学習効率が悪い」「看護婦になるための教育としては、かなり不安」、科目の中には「よくわからず、結局身につけていなかった」、「一般教養、専門科目、臨地実習の時期が偏りすぎていた」などがあった。

要望は、「学習の量を減らし、質を高めてほしい」「科目によって、理解のレベルに差がでないようにしてほしい」「内容全体を難しくしてほしい」などがあった。

また、調査時期が、国家試験の直後であり、その試

表9 カリキュラムに関する意見の自由記述

項 目	内 容
肯定的意見 7件	<ul style="list-style-type: none"> ・多くのことを学べるカリキュラムだった。 ・受け身の授業ではなく、自分にとって財産となるクラス、先生方。 ・教育理念と教育内容が大変連動している。 ・先生方が生徒の声に耳を傾けてくれる。 ・よく練られ、考えられたカリキュラム ・大学生としては、かなり刺激的。 ・年々変更を加え、より良いものになっている。
否定的意見 7件	<ul style="list-style-type: none"> ・5コマ続くと集中力が落ち、学習効率が悪い。 ・先生方の混乱している姿に不安を感じた。 ・看護婦になるための教育としては、かなり不安。 ・実習は、暗中模索で不安。 ・単科大学のため、視野を広げるのが難しい。 ・一般教養、専門科目、臨地実習の時間が偏りすぎている。 ・ある科目が良く分からず、結局身についていなかった。(国家試験の勉強を通して)
要 望 5件	<ul style="list-style-type: none"> ・より良いカリキュラムを期待します。 ・学習の量を減らし、質を高めて欲しい。 ・自主性や自律面が育つようにして欲しい。 ・科目によって、理解レベルに差がでないようにして欲しい。 ・内容全体を難しくして欲しい。
自分自身の振り返り 3件	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の勉強のペースを作る大切さを学んだ。 ・(実習) 分からないことばかりで基礎が足りなかったと気づいた。 ・試験前は、ストレスが多かったが達成感が大きかった。

(回答：14人 22件)

験の結果が否定的意見や要望の中に反映されていたのではないと思われるものもあった。

以上のように、得られた自由記述の数は少ないが、自由記述は思いもかけなかったような内容が得られ、調査側の考えの範疇を越えた学生が抱く複雑な思いや意見を反映するものであり、学習意欲を高めるより良いカリキュラムを導く手がかりになると考える。今回得られた自由記述の結果をもとに、今後はより焦点を絞った具体的な自由記述の質問内容を検討し、学生が抱いている多くの意見を引き出していくとともに、調査の実施時期を考慮していくことも考えていきたい。

おわりに

改訂カリキュラムで4年間学習した初めての学生達が卒業する年を迎え、4年生(class of 1999)57人を対象に、卒業直前にカリキュラムに対する満足度と教科カリキュラムの順序性と統合性に対する意識を質問紙法を用いて調査した。その結果、次の3点が明らかに

なった。

①「総合看護・看護研究Ⅱ」の学習には履修教科目が関連していた人は、約8割であり、また、科目群間の満足度の相関では、「総合看護・看護研究Ⅱ」と実習科目・専門科目・基礎科目群と有意な相関があった。このことは、「総合看護・看護研究」が統合化の指標となることが支持され、改訂カリキュラムの意図が反映されていると解釈できよう。しかし、関連科目数・科目名・関連程度は、様々であり、また関連性がないとする約2割の存在をふくめ、来年度以降も同一項目を追跡していきたい。

②カリキュラムに対する満足度は、全体的に高い傾向であり、総合看護看護研究Ⅱ・専門科目群、実習科目群の順に満足度は高かった。学習資源は満足度合いの分布に幅があった。

満足度への自由記述内容は、教養基礎科目群が、満足より不満足が多く、専門科目群は、意見要望と不満足、実習科目群は自分自身の振り返りなどと科目群により異なる内容であった。自由記述は書きたい人が書くという傾向があるので今後内容を一般化していくための作業として、米国のFairfield大学で使用している学生の満足度質問項目²⁾を参考に次の改善につなげられる具体的な満足度項目の検討が急務な課題として残された。

③学生の授業・教育システムに関する評価10項目の中で、肯定的評価が6割以上のものは、「専門的知識が身につく」「自分の視野を広げるのに役立つ」などであり、一方「情報処理関係の教育の充実」は、肯定評価約2割と項目により評価が異なった。他大学と比較して、本学で評価の高いものは、「教材がよく研究されている」「わかりやすい授業が多い」「自分の視野を広げるのに役立つ」であり、逆に情報処理関係の教育の充実していないことがしめされた。評価10項目と教科科目群の満足度との関係は、9項目と4科目群間に有意な相関があり、一般教養の充実と、専門科目に関するものの相関性は改訂カリキュラムの意図を支持するものとも解釈できる。

今後、同一内容を経年的に追跡していくことと、質問項目の具体化を含む検討が残された課題である。

引用文献

- 1) ベネッセ文教総研：大学満足度と大学教育の問題点 1997全国国公私立大学191校調査報告書
- 2) Student Satisfaction Tool：Valiga先生「カリキュラム評価」セミナー 聖路加看護大学教員研修 1999年7月26～30日

Abstract

**Evaluation of the 1995 Revised Curriculum by Graduating
Senior Students of St Luke's College of Nursing,
Class of 1999, after Completion of the Baccalaureate Program**

Michiko Ozawa¹⁾, Hisako Sukegawa¹⁾, Fumio Kikuta¹⁾, Shigeko Horiuchi¹⁾,
Akiko Mori¹⁾, Wakako Kushiro¹⁾, Masako Momoi¹⁾,
Chiaki Kuraya¹⁾, Keiko Ikeya¹⁾, Kazuko Katagiri¹⁾

This report identifies levels of student satisfaction with the revised curriculum (begun in 1995), as well as their satisfaction with the arrangement of subjects and the correlation among them. A survey by questionnaire was conducted just before graduation using 57 graduating seniors as subjects. The content of the questionnaire included the following:

(1) what subjects contributed to their writing the paper for Comprehensive Nursing/Nursing Research II; (2) what was the degree of satisfaction with the curriculum and reason(s); and (3) how did the students assess the classes taken, the educational facilities and equipment. The 10 question items were selected from the survey done in 1997 by Bennese Bunkyooken (Educational Survey Corporation)

The results were: (1) the subjects studied significantly contributed to writing the Comprehensive Nursing / Nursing Research II(graduation paper); (2) the correlation between each subject taken and the Comprehensive Nursing /Nursing Research II was significantly strong; (3) the degree of student satisfaction with the entire curriculum was approximately 80 %; and (4) the student responses concerning overall satisfaction with the classes in the program as well as the educational facilities and equipment were positive (over 60%) stressing that all aspects of the program were helpful in acquiring professional knowledge and broadening insight.

Future tasks should be to conduct the same questionnaire survey periodically with further elaboration of contents.

Key words

revised curriculum, student evaluation, graduating senior students

1) St. Luke's College of Nursing